

生命と反生命、トランプと反トランプ、宇宙調和と反宇宙 調和

Greatchain
2020/10/10

先日、紹介したある尼僧による警告の記事、「**尼僧がアメリカに警告：バイデン-ハリスは〈考え得る最も反生命的な大統領候補者〉**」に、もう一度注目したい。この「反生命」**Anti-Life** は、平凡でありながら、ちょっと考え付かない的確な言葉である。結局、この時勢のあり方を一口で言えば、すべてが「生命と反生命」という軸の上に展開している。生命というものは、この宇宙にただ何となく生まれ、存在するのではなく、気の遠くなるほどの、膨大な努力と注意力と、そして時間をかけて、創り出されたものとして存在する。「反生命」という言葉は、我々が忘れてこの事実気づかせる。



この写真のキャプションには、「**シスターDede Byrne は、ジョー・バイデンが〈妊娠末期の墮胎や子供殺し〉という恐ろしい事実を支持していると警告した**」とある。そこに〈ペドフィリア〉を加えてもいいだろう。

*たった今、「**カマラ・ハリスが、子供セックス虐待事件を隠ぺいしていた**」という NeonNettle ニュースが入った。

この恐ろしい事実——妊娠9か月の子どもの墮胎——は、先日の SOTN の記事にも、先の映画俳優の記事にも、取り上げられている。これは、起こってしまった、不幸な事態にど

う対処したかを言っているのではない。これは、州がこれを法制化して、これをほとんど積極的に奨励しているという事件である。性転換の積極的奨励でも、同じであろう。

尼僧はもちろんこれを、pro-life（生命の尊厳の優先）に対する、pro-choice（産まない権利の優先）の問題として、後者が極端なものになり、犯罪化してしまったことに警告しているのである。しかし、これが「反生命」と表現されることによって、まさに、人間の生き方そのものに、目を開かせることになった。ルシファーは「反生命」を唱えて、天から落とされたのである。この者たちは、まともな人間の考えを持つ者ではない。彼らは「反生命」Anti-Lifeの徒、すなわち、生命を憎む者たちである。そして同時に、神を憎む者たちである。

「生命科学」という科学の分野があって、その「ゲノムの編集」という業績に対して、昨日、ノーベル賞の授賞が発表された。しかし生命科学には、2つの対立した立場があることを知るべきである。一つは、科学者が、あたかも生命に対して、生殺与奪の権を握った権力者のような態度を取る（唯物論者、ダーウィニストの）立場。もう一つは、生命から学ぼうとして、謙虚に生命の秘密を聞き出そうとする立場である。「生命と反生命」という、道徳をも包括する観点から見れば、謙虚な科学者には、宇宙が自分の方から、解決の道を示してくれると考えるのが自然であろう。求める者に対して与えるのが、宇宙の道理である。これに対し、基本的に「生命を憎む者」に、生命の秘密が開かれることはない。

生命を憎むのでなく、愛する者の立場で探究し、かつ啓蒙を続けているのが、Intelligent Designの科学者たちである。先日、Michael Dentonという人の立場をごく短く紹介した。そこだけでも読んでいただきたい。<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/201005.pdf> このデントンの著書はもう出版されたはずだが、同時に、彼の46分間の講義ビデオが、いま利用できるのも、ぜひご覧になるとよい。

宇宙を構成する主要な物理的数値（常数）のすべてが、生命（特に人間の生命）のために、最初から、絶妙に微調整されているという事実は、前から知られている。このファイン・チューニングの事実は、物理的宇宙のみならず、この惑星のあらゆる側面（例えば、水の性質や、化学や生物の事実）に、奇跡のように働いていることがわかるとデントンは言う。これは観測や測定の実事であるから、誰もこれを疑う者はいない——はずである。この事実から、我々の生きている世界は、確実に**目的論的に構成されたもの**だと彼は結論する。

宇宙の、この目的論的解釈に間違いがないとすれば、科学と宗教という因縁の対立は、統一されるであろう。「アイツラの宗教、おれたちの科学」という馬鹿な議論はなくなるだろう。この微調整によって我々を保護してくれる創造者を、我々の親だとすれば、我々は親の慈悲や、献身的な心遣いによって生きている、まさに「生かされている」ことになる。

我々は、親の愛に「反抗」して生きることはできない——そのように意図されている。反抗してもまた戻ってきて、その懷に飛びこまねばならない。

アメリカの Antifa や民主党の、極端な、反愛国主義の反抗や反逆を、どう解釈するか？ この余りにも明瞭な、トランプ側と反トランプ側の分裂には、何か深い、隠れた意味があるのではなからうか？ これは生命を憎む「反生命」運動ではないのか？ これまで我々は、この世界の動きを、「毒麦」と「良い麦」の、次第に激越化する分裂として捉えてきた。

この目的論による宇宙解釈を、途方もないことのように思う人があるかもしれない。しかし、生物学の教科書で、ダーウィンの同調者のように言っている A・R・ウォーレスは、晩年、進化論を撤回して、目的論を押し通した。目的論的世界観は、実はごく近年まで世界の常識だった。アリストテレスの世界観は、「目的因」final cause として、目的を、世界を動かす4つの「原因」の1つだとした。これを間違いとする理由はまったくない。

これについて言いたいことがある。我々のテレビによる進化論教育では、ほとんど常に、「進化した」という代わりに「進化を遂げた」と言っている。「遂げる」とは、「努力し困難に打ち勝って、所期の目的を遂げる」という意味に使う言葉である。「思いを遂げる」にしても、意図や計画が含まれる。ダーウィン進化論は、偶然の変化と自然選択の組み合わせだから、目的も努力も、意図も計画も関係がない。これは言葉の詐術であり、教育上悪影響をもつものである。

もう一つ、リチャード・ドーキンズについて、滑稽だが同情すべき、しかし罪深い言葉の一例をあげておこう。彼は処女作で、『盲目の時計職人』ブラインド・ウォッチメーカーと言ってしまったのを、後悔したと思う。それを言ってしまうと後へ引けなくなる。後から、インテリジェント・デザインの否定できない証拠が、いくら出てきても、「進化を遂げた」というような、うまい誤魔化しができなかった。彼が正直であったことは認めねばならない。晩年、この世界には、圧倒的なデザインの証拠らしいものは確かにあるが、それはいかにもデザインされたように見せかけた **simulacrum** (まがいもの) にすぎない、と言った。

これは彼にとっても、彼の読者にとっても不幸な発言である。我々は美しい動物の姿態を見ても、美しい花や鳥を見ても、よくこれだけのものが、この世界に存在するものだと感動する。しかし、それらは「そのように見せかけただけのもの」だ、騙されるな、と、もし言われたら、そのショックと悲痛はどれほど大きいかを、考えてみればよい。そしてこれが、豊かな感受性を養いつつある子供の教育に使われたと想像してみよ。そのダメージは計り知れない。これこそ **Anti-Life** 「反生命」教育、この美しい世界を憎めと教え、そして発狂するように導く、人間憎悪の教育である。